子ども多文化交流＆JICA国際協力フェスティバル2004／子ども多文化共生シンポジウム

研 座 演 シ 資 映 他 体 ワ

兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会事務局人権教育課
TEL 078-362-3793

実施年月日 実績等	平成16年10月31日（日）午前10時30分～午後3時30分 参加人数：約4,200人 ※子ども多文化共生シンポジウムは同日午前11時～午後0時30分に開かれ、約140人の参加者を集めた
主催（共催）	兵庫県教育委員会、独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（JICA兵庫）
開催場所	独立行政法人国際協力機構兵庫国際センター（JICA兵庫）
対象	・様々な国や地域の子どもたち及びその保護者 ・国際交流・外国人児童生徒支援団体関係者 ・社会教育・学校教育関係者 ・市郡町組合教育委員会の人権教育・啓発担当者 ・教育事務所の人権教育担当職員及び人権教育推進員 ・地域教育推進委員 ・県民
人権課題	外国人

事業の目的

兵庫県では外国人県民が年々増加傾向にあり、それに伴い県内の公立小中学校に外国人の子どもが入学するケースが増えてきた。しかし、日本語理解が不十分なことや文化や生活習慣の違いなどから、疎外感を感じたり、いじめを受けるなどの問題があり、外国人児童生徒の自己実現を支援するとともに全ての児童生徒に「豊かに共生する心」をはぐくむことが課題となってきた。

そこで、平成12年に「外国人児童生徒に関わる教育指針」を策定し多文化共生の取り組みを本格的に開始。翌13年から毎年「子ども多文化交流フェスティバル」を開催。16年には「人権教育推進のための調査研究事業」のモデル事業として、子どもたちはもちろん、大人にも多文化共生の考え方を啓発するために「多文化共生フェスティバル」を開催した。地域のまちづくり協議会、関係機関・団体との連携のもと、体験を通して多文化共生について学べる交流事業を実施し、「豊かに共生する心」をはぐくむことが目的。「子ども多文化共生シンポジウム」はフェスティバルの恒例行事として毎年行われており、各界の有識者が多文化共生について議論するイベントである。

事業概要

子ども多文化共生シンポジウムのようす

毎回、地域の人々が一堂に会し、様々な国や地域の文化などを交流したり、異なる国や地域の文化を体験したりする教育・啓発活動を実施している。ステージやパネル展示などによる各国文化の発表の場を設けるとともに、フリーマーケットが開かれたり、食堂でエスニック料理が味わえるなど、“お祭り”的な要素を盛り込んでいる。具体的には下記の子ども多文化共生シンポジウムをはじめとするイベントが行われた。

●子ども多文化共生シンポジウム

地域や関係機関と連携して多文化共生に関する学習活動、多文化共生に住民主体で取り組んでいる地域のコミュニティ活動、外国人県民を支えながら多文化共生に取り組んでいるNGO・NPOなどの活動をもとに、それぞれの立場や活動に沿った意見を出しあうシンポジウムを開催した。

テーマ：「地域のネットワークを活用した子ども多文化共生教育の在り方」

コーディネーター：
芹田健太郎さん（愛知学院大学法学部教授）

パネリスト：
永田岳巳さん（加西市立宇仁小学校校長）／金宣吉さん（神戸定住外国人支援センター理事長）／松原・マリナ・アキズキさん（関西ブラジル人コミュニティ代表）

民族衣装やグッズを展示

論点：（1）多文化共生社会の実現を図るためのネットワークについて／（2）事業推進にあたってのネットワークの現状と課題について／（3）地域が一体となって多文化共生教育を推進していくためのネットワークの在り方について

そのほかに行われたイベントなど

○様々な国や地域の人々の踊りや楽器演奏を通して参加者相互に交流するステージ
○様々な国や地域の文化や遊びを通した異文化体験コーナー
○様々な国や地域の子どもたちの作品展示
○学校における多文化共生教育の実践例の展示
○まちづくり協議会による文化作品の展示
○国際交流協会やNGO／NPOの活動の紹介
○国際協力ボランティアの活動紹介
○様々な国や地域について学べる多文化ふれあいスタンプラリー
○多文化交流バザール
○外国人児童生徒等にかかわる教育相談

連携状況

共催：JICA兵庫／協賛：脇の浜ふれあいのまちづくり協議会、なぎさふれあいのまちづくり協議会、神戸地域教育推進会議、阪神南地域教育推進会議、阪神北地域教育推進会議、東播磨地域教育推進会議、北播磨地域教育推進会議／後援：（財）兵庫県国際交流協会、（財）兵庫県人権啓発協会、兵庫県外国人学校協議会、神戸新聞社

JICA兵庫はもともと独自に国際交流フェスティバルを開いていたが、県教育委員会と連携した方がより内容が充実するからと平成16年より共催という形を取るようになった。平成16年度はODAタウンミーティング、午後の部のステージなどの運営をJICAが担当した。

このほか、地元の「脇の浜」「なぎさ」ふれあいのまちづくり協議会が協賛したため、地元住民がフリーマーケットやバザーに多数参加した。国際交流協会、外国人学校協議会等関係団体や会場周辺の自治会とも連携。地域に開かれた事業やネットワークを生かした事業のモデルを各市町に示すことができた。

特色・工夫した点

○「兵庫の教育推進月間」に位置づけ、地域教育推進会議の協賛を得て、すべての県民が教育にかかわろうとする機運を高めることができた。
○県立高等学校のボランティアが、司会や受付、案内、募金などで活躍し、フェスティバルを盛り上げた。
○広報チラシの配布は、学校や自治会の回覧板を通じて行ったが、「子どもが学校から持ち帰ったチラシをたまたま見て参加しようと思った」という方もあり、直接配布するという方法が有効であることがわかった。そのほか、県の広報紙、新聞、子ども多文化共生センターのインターネットでもイベント開催を広報しており、それぞれに効果があることが確認できた。
○展示では18団体、ステージでは8団体の参加があった。事前にその一つひとつの代表者と面会して出展等の交渉を行った。面会して直接話すことにより、関係を深めることができたと感じている。

実施結果

参加者の反応・事業の反響等

アンケートでは「とても楽しかったのでまた参加したい」との意見が大変多かった。学習機会を提供するにあたって「楽しく新しい発見や学びに出会う」内容を実施することの大切さがわかった。また、多文化共生について体験的に学習できるフェスティバルを今後も開催することを望む意見が大変多く、社会教育における学習機会として参加体験型で、拘束性が無く自由に選択して学べる場のあるフェスティバルが効果的であることが確認できた。

反省点・今後の課題

○「また参加したい」「もっと学びたい」「様々な地域で実施してほしい」という回答が多かったことから、今後は、このような取り組みが県下に広がり、地域ごとに開催されることが求められている。一部地域では独自の多文化交流フェスティバルを行っているが、これをさらに広げるとともに、市町を動かす仕掛けづくりを考えていきたい。
○関係機関や地域コミュニティとの連携で事業を実施したことにより、効果的に事業展開できた。今後はNGO・NPO等の団体や地域住民の主体的な活動となるような実行委員会を組織するなどの体制づくりを推進していきたい。

フェスティバルでのステージのようす